
カードファイト！！ヴァンガード～闇の中で、影は何を思う～

Kavallerist

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カードファイト！！ヴァンガード～闇の中での影は何を思つ～

【Zコード】

Z6569Y

【作者名】

Ka valle r i s t

【あらすじ】

主人公はとある高校生ヴァンガードファイター。

いつものように終電まで友人とファイトを楽しんだ、その帰り道。

彼のイメージは現実となってしまった？

序章～漆黒に包まれて（前書き）

連載をこれ以上抱えるなと怒られた上で、『』が止ります。

今回はヴァンガードの小説といつこと、読者の皆様は『』が得意のはず。

是非、私の拙い文を補うイメージ力をお願いします！

また注意として、これは“アニメ作品及び漫画作品の一次小説ではない”ということを『』承知ください。
主人公は現実世界の男の子です。

アイチくんや櫂くんのハーフロマンスなんて当然の如く『』ませんので、ご容赦を。

それでもOKとこづ心の広い方は、『』をお進み下さい。

長文失礼いたしました。

序章～漆黒に包まれて

俺は
斎藤
影猪。

日本の東京に住む高校一年生だ。

今は放課後、友人と共にとあるカードゲームを楽しむ真っ最中。

「ツインドライブ、チェック。：1枚目、トリガーなし。2枚目、クリティカルトリガーゲット？」

「うぎやあああ？ 負けたぜっ！」

そのゲームの名は「ヴァンガード」。

架空の大地「惑星クレイ」で、様々な種族のキャラクターを戦わせるゲームだ。詳しいことは公式サイト及びアニメを見よう。俺も从此から入ったんだ。

まあメタ発言は置いといて、たった今、友人のダメージゾーンに6枚目のカードが置かれた。それが意味するのは、我が友の敗北。友人の名は日野和樹。俺の唯一のヴァンガード仲間。

日野はバラバラになつたカードを丁寧にまとめ始めた。

「強え…強すぎる…シャドウバラディン。なぜそんなに強いんだ」

シャドウバラディンとは、俺が使つてゐるカードのクラン（種族）のこと。要するに、闇の騎士団。

対する日野が操るのは「ロイヤルバラディン」。シャドウバラディンとは対極に位置する光の騎士団。

名前や設定の相性は五分五分だが…俺が戦うと、シャドウバラディンは必ず勝利するのだ。

俺はとりあえず適当な返事をする。

「運だる、運。俺のトリガー率が異常なだけ。」

「そうなのかな…でも、ロイヤルパラディン以外のデッキだと五分五分くらいだろ?」

そう言われてみると確かにそうで、他のファイト(対戦)だと、様々な要因でペインチになつたり負けたりもする。だが、それでもロイヤルパラディンにだけは強い。

「強いて言つなら

「おひ

「宿命とか、そういうことなんじやねえのか?」

「なるほどなwww納得だわwww

聞こえや言つ方(中身も)は悪いが、シャドウパラディンはロイヤルパラディンの「負の要素」、俗に言つ「ばぐれもの」から完成している。切つても切れない宿命なのだろう。

だが、一勝できないと言つのも流石に悔しいらしい。日野の反応からはそう読み取れる。

「まあ、頑張つて勝てるようひげつことだな

「くわお、余裕ひきやがつてーー 見てひりよ~いつか光でかき消してやる?」

「やつてみひ~ ろつと。俺は終電があるから帰るぜ」

「んん、もうそんな時間か?」

電車通学生の俺には、すぐ近くに駅のある我が校は本当に助かる。こんなに遅くまで遊んでいられるのもやのおかげだ。

「じゃあ俺も帰るか。じゃーな
「ねつ。じゃなー」

カバンを取り、教室を出て階段を駆け下りる。
冬の夜風が頬を切り裂き、吐息を白く濁らせた。

十数台の自動車が走る車道を沿つて、いつもの駅へ向かう。

「…ひやああああ、寒い…」

もう一枚上着を着たい衝動に駆られるが、そんな暇は無い。
…と、そう思ったとき。視界の端に、青い光の線が映った。

「…？サイリウム？」

よくライブやイベントで見る、青白い螢光色。誰かが手に持つているのかと思ったが、それは人間とは思えない低位置で、素早くうごいていた。

「…誰かが犬っこにイタズラしたのかね…よつと

対向車線に渡り、その何かに近づく。
どうやら（暗くて見えないが）動物のよつて、それは機敏に走り回る。

「待てつて？ とつてやるからつ」

黒いそれは空を飛ぶかのように地を駆る。それを追うのに必死で、俺は。

「…………あ

車道に出ていたことに気がつかなかつた。

かわりに、一つ気づいたことがある。

そう、あの生き物。その歩道からこりこりを眺める、あいつ。犬の
よつなそれに、俺は見覚えがある。

迫るトラック、響き渡るクラクション。

頭に浮かんだ、とある一文。

『黒いハイドッグは、嵐を呼ぶ。それは漆黒の嵐だ。』

——フルバウ。俺のテックの、ファーストヴァンガード。

さよなら、俺。

序章～漆黒に包まれて（後書き）

短い文ですみません。

また次話にてお会いしましょう。

感想等、 いただけると幸いです。

第一話、奈落への道程（前書き）

連投させていただきます。ストックなんてありません。

今回はシャドウバラティンのの方が登場します。

出番を増やして欲しいカード等ございましたら、感想にてお寄せ下さい。

第一話、奈落への道程

「ん……。」

目が覚めて、辺りを見回す。いつも通りで、なんの変哲もない日常。
「…あれ？」

何か嫌な夢を見ていたようで、それがなんなか思い出せないのが
もどかしい。
思い出せないので大したことでは無いだろうと台所へ向かい、
朝食を取る。

「…なんだつたつけ」

疑問は残つたまま、皿を片付けて時計を見る。

「やべつー！」

いつもの電車の時間に間に合ひがどうかといつ、ギリギリのライン。

直ぐに部屋に戻り、制服に着替えてからカバンに教科書、サイフを
詰めながら台所で弁当をしまい、最後にデッキケースを入れる。

近くのバス停からバスに乗つて駅へ、電車に乗つて駅を二つ通り過
ぎ。

目的の駅で足を下ろし、徒步三分の学校舎へ。

「ま、間に合つた…」

時計は授業開始15分前を指している。思いの外時間が余ってしまった。

「よー。忙しそうだな、影猶」

「ああ、おはよう和樹…。そだ、時間あるだろ? 一回ファイトしようぜ」

そう言つて、デッキケースをチラつかせる。

だが、田野は悲しそうな顔で首を横に振つた。

「それはできないんだよ、影猶。」

「どーした?…デッキでも忘れたか?」

「…だつて、お前は」

『死んでるんだから――――――』

「つ? ?」

田覚めると、そこは闇。

黒い、暗い、冷たい邪氣。

「夢……か……そか、思い出した。俺はトラックに轢かれて、それで死んで…。」

『そう、貴様は死んだ』

「…? 誰だ…?」

姿は見えず、声だけが頭に響いてくる。
まるで雷鳴のようにくぐもつた声だった。

『私を知らぬか?』

『んな初対面の相手を知るはず無いだろ。』

『ほう…。ならば、教えてやろう…マイヴァンガードよ』

『…マイヴァンガード?』

刹那、目の前の闇は輝いて細くなり、長くなり、広がり、姿を変えて行く。

それは、まさしく “龍” の姿。

「…まさか、お前…?」

『やつと分かつたか』

そう。俺は当然見覚えがある。

死ぬ前にも田にした、お前の名は…

『奈落竜、ファンタム・ブラスター・ドラゴン…?』

『その通りだ、マイヴァンガード』

俺のデッキテーマもある、シャドウバラティン。その騎士団を作った張本人であり、負の根源。

まさか、俺が死ぬときまで登場するとは…俺のイメージ力の所為だらうか。

「死んで行く俺の見送りかい？」

『違うな。』

「……じゃあ何よ。俺を喰いに来たとか？」

『それも違う。』

「えー、じゃあなんだよ」

黒い翼は少し闇を巻き上げ、槍を俺に向かた。

『シャドウパラダインに来たくは無いか？』

『……はい？ どうこう意味ですかな』

『私は、貴様を蘇らせることが可能だ。だが、死に干渉して、魂の行く先を決めることはできる』

「へえ」

『惑星クレイに飛ばしてやれ、ここなのだ』

正直、俺は今の状況を夢に思えていた。

目の前にファンтомブラスターがいて、急に「クレイに連れてってやる」なんて… そういう信じられない。

「ふーん」

『……信じてないな？』

「だつて… ねえ。確かにお前は今ここにいるのかもだけど… そう簡単に信じられる訳がないじゃん」

『… 面倒くさい男だな、お前は』

「えー」

「… でも、まあ。どうせこれも夢なり、思つたり試して騙されても悪く無いだろ？」

せつかく来てくれた訳だし。

「…行つたとして、何かして欲しことでもあるのか？」

『何故?』

「俺はお前がなんの利益も無いのに動くとは思わないんでね」

『…流石はマイヴァンガード』

『うやら当たつていたようだ。』

ファンタムは槍を收め、翼をたたむ。

『だが、今回は「唯死に逝く生を見過」せない』と云つておつて
いただけないだろつか。』

『…したたかだね、お前は』

『褒め言葉ととつておつて』

やはり、ここつは俺のイメージ通り。
それだけに、安心して身を任せられるのかもしれない。

『じやあそつこつひととくか。いこよ、行つ』

『…案外あつやつしていゐな。本当に良いんだな?』

『…つつこつよ。…なあに、偶には長考しないつてのもありだら?』

『…わざわざだ。それでは、マイヴァンガード。』

そう言つて、ファンタムは槍を構える。

『よつひよつ、我らが闇の騎士団ぐ。――――歓迎しきよつ

シャドウ・イロージョンによつて貫かれ、

俺はまた深い闇へと沈んで行つた。

「痛たたた」

「…おや、」「れは」「れは」

どこの部屋の、魔方陣の上。

「いらっしゃいます、マイ、ヴァンガード。歓迎させていただきます」「あ、ああ」「

目の前で深々と頭を下げるのは、暗黒魔導士バイヴ・カー。

どうやら、俺が見ているのは夢じゃ無いみたいだな。

第一話、奈落への道程（後書き）

次回から長文になると思われます。

キャラの口調は全て私のイメージです。ご了承下さい。

感想等お待ちしております。

第一話、智に飢えた魔物は血を求め、闇を彷徨つ（前書き）

今は、私です。

今回からゴーリットが登場します。今回はバイヴ・カー様。ちらりとあのゴーリットも…？

全てのゴーリットの口調は私のイメージです。それでもよろしければ、どうぞお進み下れ…？

第一話、智に飢えた魔物は血を求め、闇を彷徨つ

「 なあ

「 はい、なんでしょう」

長い廊下を、バイヴ・カーの後ろをついて進む。彼は先程出会った時から笑顔を絶やしていない。逆に怖い。

「一応聞くが、お前が俺を召喚したんだな?」

「はい。奈落竜様の命によつて」

「ふーん…人間の魂が召喚出来るとはね」

さつきの部屋にあつた魔方陣は召喚魔法の物だつたらしい。バイヴ・カーのスキルは安定のようだ。

ファンタムブラスターに導かれた後、俺はカーに召喚されたとうことになつてゐる。

「私だけでなく、マーハも召喚魔法を使えますよ

「ほー。」

話に出て來た「マーハ」というのはおそらく「漆黒の乙女マーハ」のことだろう。バイヴ・カーと同じくスペリオルコールといつ仲間を呼ぶスキルを持つてゐる、シャドウバラティンの天才指揮官だ。

「…スペリオルコールスキルは召喚魔法扱いなのか…」

「? 何か仰りましたか?」

「いや、なんでも無いさ」

あまりカードの効果の話をしたりすると、ヴァンガードのルール

まで教えないのはいけなくなりそうだ。

それは面倒なので、できる限りカードの話はしないことにした。

「ところで、シャドウバラティンの拠点はユナイテッド・サンクチュアリってだけは聞いたことがあるんだが…」「なぜビード?」

窓の無い廊下は暗く、青白い照明だけが明るさを保つていて外は覗けない。

カーはひばりに振り向いて微笑み、

「魔界城、ファタリテートですよ」

と答えた。

ファタリテートは、ヴァンガードではユーチュ (モンスター) として存在している。

拠点にして、兵器である…フレーバーテキストはそのままの意味だつたようだ。

「つてことは、この城は今も進軍中とか?」

「いえ、今は機動を停止させています。マーハの指示もありませんから」

「ふむふむ…もう一つ質問、いいか?」

「はい、もちろんです」

「俺らは今どこに向かってるんだ?」

その言葉で、カーはまた笑顔のまま動きを止めた。

「俺は数歩後ずさつて、こつそりと周りを確認する…隠れられそうな部屋は無い。」

「特にどこへも。あなた様を案内するよつて、とだけ奈落竜様から

は伝えられているので

「（あのやうお？）…で、人気のないところに俺の血液をとるつも
りだろ」

「おや、よく分かりましたね」

自分の使つてるコニットの」と位把握してゐる。俺は内心でそつ
思いながらも口には出せない。

バイヴ・カーのコニット説明はこうだ。

奈落竜の傍に仕える、黒魔術の粋を極めた力オス・ウイザード。
ありとあらゆる生物の血液から魔力を採取できる。

平時は社交的な性格をしており、騎士団所属の魔女や戦士たちと
も交友があるが、

それは効率よく対象から血液を奪うための演技にすぎない。
彼にとつては敵も味方も全てが研究の対象でしか無いのである。

…つまり、ヴァンガード（先導者）である俺も例外では無いとい
う」と…だから…

「逃げる？」

三十六計逃げるに如かず。今まで来た道を全力で戻つた。
が、魔導士の前に逃走は効かず。

はるか後方からきこえるカーの声が、やけに近く感じた。

「そう簡単に逃げられると思ひですか？」

「うおおおおおおおお…」

カーが指で宙をなぞると、俺の身体は手繩り寄せられるように力

ーの元へ。そのまま壁に押し付けられる。

「さて、マイ・ヴァンガードの血液……さぞ質の良い魔力が抽出できることでしょうね？」

「俺は唯の人間だから魔力なんてねえぞ！…？」

「では失礼して」

「ぎゃあああああ？」

カーの持つナイフが、俺の首筋へ向かう。その刃先がギラリと輝いた、瞬間。

「…そこで何をしている？ バイ・ヴ・カー」

凛とした声が、無機質な廊下に響いた。現れたのは、黒衣を纏つた水色の髪の少女。

少女を見て、カーはまた変わらぬ笑顔を見せる。

「やあ、マー・ハ。私は作業をしているだけですよ」「ヴァンガードの血液を採取するだけの簡単なお仕事とか言わせねえからな！？」

「少し静かになさって下さいマイ・ヴァンガード」

「これが静かにしてられるかつ？」

俺は全力で、首に回ったカーの腕を振り払おうとする。

マー・ハは「ヴァンガード…？」と首を傾げ、カーに押さえつけられる俺の目の前に立つ。

「こいつが私達のヴァンガードか？」

「そのようだよ。ですよね、マイ・ヴァンガード？」

「そうだって？ そうだから離して？ 賴むから？」

なんでクレイに来て早々にこんなピンチにならなきゃいけないんだ、と叫びながら、マーハに助けを求める。

「…カー、離してやれ」

「嫌だと言つたら？」

「奈落竜様にこのことを伝える」

カーはビクリと身体を震わせて手を離す。

その所為で、俺は地面に尻を強打する」とになってしまった。

「じょ、冗談ですよ冗談。ねえ、マイヴァンガードっ？」

「シャレにならんわ…。」

「…………」

首元を摩つていると、マーハがじつとこちらを見ている事に気が付いた。

「な、何か？」

「……ふんつ。」

顔を背け、そそくさと去つて行く少女。

カーがため息をついて、こちらに歩み寄つて來た。

「ふう、全く…彼女には冗談が通じませんねえ」

「…まるで、お前のような人間が我々のヴァンガードとは」とでも言つたそうな表情だつたな」

「むしろ「お前のようなゴミに我々が操られるとは心外だ」では?」「ぶつ飛ばすぞお前」

「冗談はさておいて、とカーは相変わらず笑顔を崩さない。

「「これからどうしますか？」

「どうつて…」

正直、まだ何も考えられない。今何をすべきなのか、なんなのか。

ファンタムは「シャドウバラティンに来ないか」と言つた…これはつまり、闇の騎士団に入団しろということだひつ。

「カー、シャドウバラティンに入るためにはどうすればいい？」
「入る？ ヴァンガード、あなた様はすでにシャドウバラティンに入隊されておりますが」
「……は？」

カーはまた宙をなぞる。今度は魔方陣がディスプレイのようになり、現在のシャドウバラティンの団員名が全て表示された。カーはその一番端を指さす。

「「」です、「」。「ヴァンガード」の欄に」
「…え？ あ、え？」

まるで英語の筆記体のような文字が、確かにそこには記されていた。

だが……

「読みねえよ。」

「なるほど、クレイの言語が分かりませんか。確かに書いてあるのですが」

「まあ、じゃあ何かしらの手続きを取らなくて良いわけ？」

「やうなりますね。あなた様はネヴァンと同じよつて特別待遇のようです」

「ネヴァンか、と俺は思つ。

「髑髏の魔女ネヴァン」。彼女は邪術の使い手で、その研究がロイヤルパラディンにいた時に見つかり、追われていたところをファンタムの勧誘に誘われるまま入団したといつ。

「なら、本格的に…何をするべきか分からないな…。どうしよう」
「…では、この城を一通り散策して見てはいかがでしょう。ここの中の地理にも慣れておくべきですし、皆に挨拶する意味もありますよ」

「ふむ」

思いの外まともな意見で、少々驚いたが…折角だ、いう通りにしてみるか。

「じゃあやつするかな。」

「そうですか。では、私はこれで

「何だ、行くのか。」

「はい。私も忙しいんですね」

それでは、とだけ残して、カーはその場から消えた。 気配一つ残さず。

「…さて、行くか？」

まずは、この終わりの見えない廊下を歩き回るにじとした。

「まったく…どういふことでしょうね」

カーの手には、先程、ヴァンガードである影猶に突きつけたナイフがあつた。

——刃が九十度曲がつた状態で。

「これでは血液採取も何も無いじゃ無いですか……」

だが、カーの口元は自然と歪み始める。

「それでこそ知りたい…あの方の血を…魔力を…? ふふ、ははははははははは? ? ? ?」

第一話、智に飢えた魔物は血を求め、闇を彷徨つ（後書き）

感想等、できるだけいただけたるとの小説の向上につながります。

それでは、また次話でお会いしましょ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6569y/>

カードファイト！！ヴァンガード～闇の中で、影は何を思う～
2011年11月20日12時50分発行